

た な か み 山

第 2 号 行 具 桐 生 民 倶 楽 部

桐生町の地場産業(ついで)

元大津市会議員 山本 依蔵

桐生の名物ナンダッセ

箔屋に紙屋に砂防山

夏は涼しき落が滝

粕坂流れ出る桐生川

草津に至る一里半

明治から大正の初期、桐生の紙漉き場の女衆が歌った風物詩である。

箔屋や紙屋は、当時の地場産業、

砂防山は、粕坂の禿山に内務省が巨費を投じて連年砂防工事を施行。地

元桐生の農閑期の唯一の働き場となっていた。

さて紙屋については、成子哲郎氏一軒のみとなり母親の成子ちかさんが県の無形文化財に指定されているが、この手漉和紙の技がいつ頃桐生の山里へ伝えられたかは定かではないが、栗太郎志巻三の雁皮紙の項によると、

「雁皮紙は、上田上村大字桐生にて製造。初めは、元文寛保の頃(一七三六〜一七四三)出庭村(栗東町)法泉寺の僧某が越前の製紙法を伝え、桐生の人佐治兵衛の女某この法を伝習し、自宅において製造を始め、漸く同業も増加せり。

越前の製紙法は、土を混ぜざるにより虫害に罹り安しとて非難ありしかば、遂に摂津国名塩の製紙家を招き土を混入する法を習得し以来その法により製造す。

現在、製紙家十数戸あり。初めは骨牌(かるた)用箔地等の需要向な

りしが、明治七、八年の頃地券改正に伴なり地券紙、大蔵省の公債用紙等を多数製造したり。

現在にては、金糸用・扇子用・色紙短冊、経文用紙等を漉き出し、年産八百六十縮、代金六千七百六十円余なり。

とあって、越前から技法が伝えられたようである。

明治の中期から大正年間にかけて十数戸の紙漉屋となり、地元及び草津方面から若い女性が式名乃至数名住込み女中として作業に従事した。

昼は、一連の紙漉き作業、夜は、原料雁皮の荒皮はぎ及び煮沸後の雁

皮原料の打砕き作業(パンガチ)がなされる。

また、若い女性の夜の作業場は、村の若者の集い場となり、それぞれ手土産を持って寄り集まり親しくなるにつれ自らも作業を手伝うようになり、さながら青年のレジャーの場と化していた。

夏の盆踊りは、これら男女のふれ合いの場。お寺の報恩講には、老人より青年男女が満堂参詣。境内には露店も立ちならんだといわれている。他の村と隔絶孤立の山里であったが、地場産業紙漉きによってにぎわったことが窺える。

お正月のお供えとしめ飾り

山本 文良

お正月が近づくと、大人も子どももあわただしく走りまわります。まず、餅つき準備、そして、

きょうは、うちの餅つきじゃ
お父さんがついて
お母さんが手がえし
姉さん手伝い
うち中ぐるぐる
てんてこまいじゃ
ちよつと「餅」の語源を探ると、

1、長もちするから
2、もち歩くことができるから
3、満月のことを望月という

などの諸説がある。確かに保存がきき、携帯にも便利であり、形もまわって満月のようである。そんなところから名付けられたと言われています。

餅は神聖であり、不思議な力を秘めています。

「お正月のお鏡・お雑煮・ひし餅」
神事や祝いごと、節句には、なくてはならないものとなっています。

また、
「出産・授乳・誕生祝い」
母親や赤ちゃんに食べさせると、



謹 賀 新 年

力が出ると言われ、今も細々ながら
続いています。

次に大掃除(すす払い)をして掃
き清めます。

さらに、しめ飾りと言ってしめな
わを中心に神聖な場所に飾りつけま
す。

門松 門口の前に、松竹梅を組合
わせ、しめ縄を張って立てます。

少し簡単なものでは、松の芯を伐
つてきて軸を半紙で巻き水引きで結
んで、門口の左右の柱に飾ります。

しかし、戦後この風習はだんだん
さびれてしまいました。

今では、神社の専売特許のかたち
になっています。

中心のしめ縄ですが、文字で拾っ
てみると、

「注連、注連縄、標縄、七五三縄、
四目縄」とも書きます。

神社の社殿、神門、鳥居、祭場の
周囲、神事の用具、神柵、かまど、
井戸、老大木、大岩など神聖、清浄
な区域や物体であることを標示する
ために使われています。

つくり方は、縄と同じく左ないに
します。

垂れは、大きく分けると二種類あ
って「紙垂」と言って白紙を細くき
つて垂らすもの。もう一つは、「わ
ら」で作ったものがあります。

この場合、さらに一定の間隔をお
いて七・五・三本垂らすものと、隙
間なく垂らすものがあります。

張り方は、ない始めの本を上位あ
るいは神前に向かって右においてか
けます。

四方に張る場合は、神座の右奥か
ら右前、左前、左奥とまわっていく
のが原則とされています。

また、近年自動車に「しめ飾り」
をつける人も増えてきました。
その他、お正月の縁起ものとして

鍬の柄を見て父祖の苦勞を偲ぶ

山 本 三 郎

ここでいう鍬とは、大鍬のことで
す。

この鍬は、殆ど土を掘るのに用い
る道具で、学問的には「鍬形」「慈姑
形」といって兜のように、切り差し
刃の上より角が二本そびえています。

つまり、鍬本来の姿を「そびやか

は、宝舟があります。

桐生町の古川清正氏は、わら細工
の技術保存者として有名で人々から
親しまれておられます。

お鏡ができ、掃き清められ、しめ
飾りができると、最後にお供えしま
す。

各家では、三方にウラジロを敷き
その上にお鏡を二重ねとみかんをの
せて、まず神仏にお供えします。

また、半紙、お鏡、みかんの略式
も行なわれています。

す」とか「すすむ」とも言います。

この大鍬は、溜池の用水が漏れる
と、修理には欠かせない道具の一つ
です。

改修方は、早速池の全体を視て工
法を決定します。

その後、池の堤防の溝切り、練り
土による穴詰めが行なわれます。

労力はいるが、鍬幅の大きいこと
による作業能率の向上は、何と言っ
てもこの大鍬に限ります。

この他にも大鍬は、大溝の土揚げ、
芝生の切り離し、畦畔の練り土を平
らにするなど用途はきわめて多く貴
重な道具であります。

今から二十年前、農機具の整理整

その他、日常お世話になっている

台所(かまど)、勉強机乗物、農機に
も供えて感謝の意を表わします。

今は昔語りですが、農家では牛に
もお雑煮を食べさせられました。

頓をしていた折り、上図のように鍬

の握手(柄)がなんと『左右の手で握
っていた一定の箇所が完全に擦り減
り、両手の型が深く残されている。』
のを発見しました。

確かにこの柄は、樫の木で作った
ものであり、そう簡単に擦り減るも
のではありません。

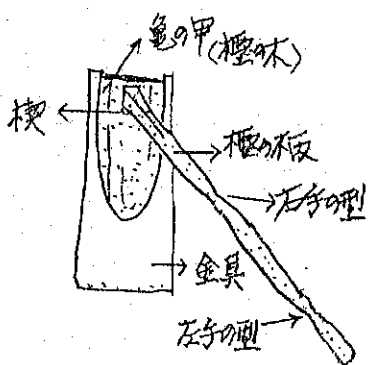
だとすると、労働が激しく動作を
同じ要領で何回となく繰り返し、同
じ位置を握りしめたので、このよう
にてのひらの型が出来たのだと、胸
を強くうたれました。

鍬の柄一つでさえ、当時の苦勞を
偲ぶことができるのです。

本当に貴重な柄であることに、あ
らためて気付きました。

ここで申し上げたいことは、鍬の
柄だけでなく、すべてのもの一つ一
つ取り上げて昔の苦勞と生活振り
その姿に深い感銘を受けるのであり
ます。

いい換えれば、先人の方々の血と
汗の結晶が滲んでいて、当時の生活
振りがうかがわれます。



血のかよった祖父の鍬

本当に、戦前戦後は大きく変わり
ました。

以前は、着る物、履く物、身に
ける物、手袋といえども、特別の事
情のない限り絶体に使わず、また、
大切にする習慣や風習がありました。
これに反して現代は、人間の体を
安全に保護し美化の方向に変わりま
した。

|| 金勝寺裏参道 ||

四か所の磨崖仏は何を語っているか(地)

山本文良

私たちの桐生町は、山岳密教文化
を知るうえで欠かすことのできない
古刹、栗東町の山中にある金勝寺の
裏参道であることはご存じの通りで
す。

この寺は、奈良時代天平五年(七
三三) 聖武天皇の勅願により、平城
京の鬼門にあたるこの地に都の鎮護
を祈って東大寺の良弁僧正が建て、

今日のように文明化されて来た時
代に生かされていることは、本当に
幸せであり喜びです。

わずかに四十年前と現在とは、比較
にならない程経済大国になり、物の
豊かさ、便利さの中に埋もれています。
この基盤を築いて下さった先人の
ご苦労を一日たりとも忘れず、感謝
の念で頑張りたいと思っています。

丈六釈迦如来像をおまつりしたこと
に始まります。

それから今日まで、一二五六六年の
年月が流れました。

この参道には、俗に言う「逆さ観
音」そして「狛坂寺跡磨崖仏」「重
岩磨崖仏」「茶沸し観音」が点在し
ています。

昔から誰言うもなく、逆さ観音・

茶沸し観音で親しまれていますが、
学問的には、観音ではなく阿弥陀如
来と推定されています。

これは、おそらく尊像の基本型を
知らなかったことと、来世より現世
の利やくを求め願っていたからでは
ないかと思われます。
左右の持仏は勢至、観音菩薩です。
では、なぜあのように点在してい
るのでしょうか。

大昔は、山中には道らしき道はな
く、人々は谷川に沿って登ったり、
尾根を利用したのです。

この近くに大きな岩等があると、
そこに仏像を刻んで信仰と参拝者の
便をはかったのです。

この磨崖仏は「おうお、よく来た
ね。ここから行くと、金勝寺へお参
りできますよ。気をつけて行きなさい。」と語り案内してくれているので
す。即ち「道標」なのです。

勿論、あの大岩に仏像を彫ること
は至難の業です。
無限の信仰心、強固な意志、強し
んな体力。……

槌とのみを頼りに黙々と彫り続け
て下さったそのお姿。私たちは、絶
大なる尊敬と感謝の心を忘れてはな
らないと思います。

【備考】

○逆さ観音 鎌倉時代作 三尊仏

浮き彫り

○狛坂寺跡磨崖仏

平安時代貞観(八五九一
八七七)作 三尊仏

厚肉彫り 計12+3

○重岩磨崖仏

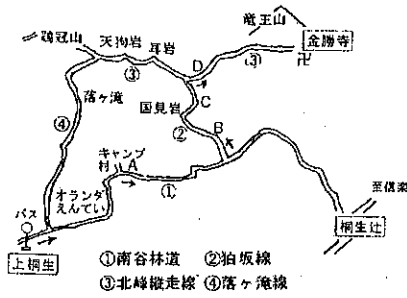
室町時代作 阿弥陀三

尊仏、地藏尊線彫り

○茶沸し観音 平安時代初作 一体

(他、塔、三尊仏後刻)

アーチ型石がん浮彫り



金勝寺裏参道磨崖仏の略図



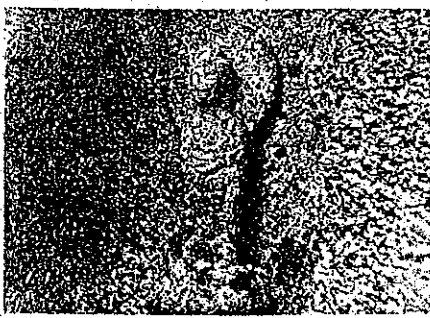
A. 逆さ観音



B. 狛坂寺跡磨崖仏



C. 重岩磨崖仏



D. 茶沸観音

そろばん 割り算の九々(下)

山本文良

前回の九々に引続いて、今回は運珠法についてご紹介します。

是非、試して下さい。先人の知恵のすばらしさがわかり、もっと珠を動かしたくなります。

【例一】 $1032 \div 4 \parallel 258$
まず、割る数に応じてその段の九々を使います。

四一 二十二 四二 天作の五
四三 七十二 四進が一十

4で10を割ると、答えは二回あって2余ります。だから「四一 二十二」。これをそのまま利用したのが、割算の九々であり答えなのです。

二十二の二は2回。十二は、余りの2をたしなさいということですが、運珠法としては、次のようにします。

- A、四一 二十二
- 1を2にして下へ2を加える。
- B、加えた2を4で割る。
- この時、2を20と考え4で20を割ると5。つまり「四二 天作の五」
- 2を5に変える。(作る)
- C、次の3を30と考え、4で30を割ると七回あって2余る。つま

り「四三 七十二」

3を7に変えて下へ2を加える。
D、残りの4を40と考え、4で40を割ると10回。つまり「四進が一十」

4を除いて十の位に1上げる
(進) 答え258となる。

なお、掛け算の九々で検算すると正誤がわかります。

二の段、三の段も、この応用で計算ができます。

練習 $1234 \div 2 = 1134 \div 3$
余りが出たら、続いて九々を使って運珠します。

【例二】 $6783 \div 5 \parallel 1348.6$
五一 加一 五二 加二
五三 加三 五四 加四
五進が一十

A、5で6を割ると、一回あって1余る。
「五進が一十」
6の5を払って上に1入れる。

B、1余るから
「五一 加一」
1に1加えて2にする。

C、7の5を払って上に入れる。
「五進が一十」

D、「五二 加二」
2に2加えて4にする。

E、「五四 加四」
4に4を加えて8にする。

F、「五三 加三」

3に3を加えて6にする。
答え 1348.6 となる。

【例三】 $211014 \div 6 \parallel 35169$
六一 下加の四 六二 三十二
六三 天作の五 六四 六十四
六五 八十二 六進が一十

A、「六二 三十二」

B、「六三 天作の五」

C、「六一 下加の四」
1はそのまま余りの4を下へ加える(下加)

D、「六四 六十四」
E、「六五 八十二」
F、「六進が一十」
答え 35169
これができると、七・八・九の各段もできます。

練習 $301 \div 7 = 5216 \div 8$
2115 ÷ 9

花を生けて二十年

桐生生花グループ 山本和子

昭和四十二年。この年は、瀬田町(上田上と瀬田)が大津市と合併した思い出の年です。

私たちの生花グループもこの年、公民館活動の一端として発足しました。

それから今日まで、月二回休まず続けて参りました。

会員は初めのころは三十人ほどでしたが、今は残念ながら十三名です。

しかし、それだけに頑張っています。花は、季節を先取りしてくれま

す。玄關に床の間に、水々しい花が生けてあると、家に活気があり、来客はおろか帰宅した時、優しく迎えてくれ、人の心をなごませてくれます。

また、おかげで花の名前もたくさん知ることができました。

お正月には、先生の発案により毎年花供養を行なっています。

私たちの流派は、「池の坊です」。花の心を心として、清く正しくそして美しく生きたいと願っています。

「あいさしとお願い」

新年おめでとうございます。

昨年中は、ご投稿・ご感想・ご意見等お寄せいただき、本当にありがとうございました。

ご支援のおかげで第二号を発刊することができました。

今後共、よろしくお願い申し上げます。

桐生民具クラブ代表

山本文良 ㊟〇〇七七

有線五六七八

